

---

## 通訳 高嶋弥生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

通訳 高嶋弥生

### 【Nコード】

N0481C

### 【作者名】

### 【あらすじ】

テレビ番組の収録にやってきた外国人のジェフ。高嶋弥生、通訳としての実力を発揮できるか。

きらびやかなスタジオに、輝く笑顔の女性アナウンサーの音が響く。

「本日のスペシャルゲストは、このたび来日したジェフ・ミントさんです」

カメラは、女性アナウンサーの隣にいる長身痩躯で金髪碧眼の男を写す。

「Hello」

「通訳は高嶋弥生さんです。よろしくお願いします」

金髪の横には、黒くまっすぐな髪を肩まで伸ばした真面目そうな女性が立っていた。

「よろしく」

女性アナウンサーの先導で、三人はスタジオ中央のソファに腰をおろした。

「それではさっそくですが、ジェフさんの来日の目的はなんですか？」

金髪の男はオーバーアクションを取りながら、にこやかに言った。

「I am a pen」

通訳の女性は表情を変えずに抑揚のない声をマイクにのせた。

「新作のアルバムをばらまくついでにライブで何人か殺すぜ」

「なるほど、殺害を……つて、え？ 本当に？」

金髪の男は片目を閉じて親指を立てた。

「My name is Mike」

「この糞野郎、産婦人科医最高」

少し啞然としてしまった女性アナウンサーだったが、気を取り直す。次の質問に取り掛かった。

「……えーと、それでは次の質問ですが、このアルバムの中でおすすめするとしたらどの曲ですか？」

金髪の男はあごに手をかけてうつむいた後、真剣な表情で呟いた。

「Is this a chair?」

「今なら分かる。あいつは男だったんだ。道理で狭いわけだぜ」

女性アナウンサーは、ハンカチで額の汗を拭いた。

「……えー、ジェフさんのライブにはいつも人をドッキリさせるような演出があるのですが、今回はどのような仕掛けを予定しているのですか?」

金髪の男は笑顔でソファの前の机を指差しながら答えた。

「Here is three desks」

「お前の死をもって神へのささげ物としよう。今夜ヒマ?」

「今デスクって言ってませんでした?」

「いえ、Death 苦といったのです」

「はあ、なるほど……漢字!」

「ジェフさんは日本文化に造詣が深く、漢字を独力でマスターされたのです」

「それはすごいですね! ジェフさんの好きな漢字はなんですか?」

金髪の男は白い歯を見せながら、親指を自分に向かって立てた。

「I love me」

「ピザです」

「ピザ!? いやそれ漢字じゃないですし、ラブがどうかいってませんでした?」

「それはジェフさんがラブドールレトリバーを食べた事を言っているのです」

「ああ、そうだったんですか……食べた!」

金髪の男は女性アナウンサーが座っているソファを指差した。

「A chair is bigger than a desk」

「ここはどこだ。俺は誰だ」

「いきなり記憶喪失ですか! といいますか、あなたさつきから適当な通訳をしてませんか?」

女性アナウンサーの指摘に、金髪と黒髪の二人はきょとんとした

表情をしたあと、揃って反論した。

「ソナコトナイヨ」

「何を言っているんですか」

「はあ……え？ 今ジェフさん日本語喋ってませんでした？」

黒髪の女性は心外だという表情を見せた。

「そんなわけないでしょう。ジェフさんはこう見えても英検三級なんですから」

「エイゴヨクワカンナイ」

しばらく固まっていた女性アナウンサーは、こめかみの辺りに静脈を浮き上がらせると、小刻みに震えながら金髪にマイクを向けた。

「意味がわからないので殺していいですか？」

「イトモ」

「駄目だそうです」

「きいいいいー！！ あんたの通訳は

しばらくお待ちください

所々ちぎられた金髪が痛々しい男と、爆発したような黒髪が面白い女性が、綿の飛び出したソファに座っている。女性アナウンサーが座っていた少しささくれたソファには、熊のぬいぐるみが置いてあった。

金髪の男がカメラに向かって笑顔で手を振りながら口を開いた。

「ソレデハミナサンゴキゲンヨウ」

「いい感じよ、ジェフ」

笑顔で手を振る二人の映像でフェードアウト。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0481c/>

---

通訳 高嶋弥生

2010年10月8日21時56分発行